

空間・場所・ジェンダー関係：第1部

—フェミニスト経験主義と社会的関係についての地理学—

リンダ・マクドウェル*
(吉田 容子** 訳)

Linda MCDOWELL

Space, place and gender relations: Part I.

Feminist empiricism and the geography of social relations

Progress in Human Geography, 17-2, 1993, pp. 157-179

© 1997 by Edward Arnold

I はじめに：スタイルを損なうことについて

かつて Virginia Woolf は、「重大な議論を展望することは、外套のポケットに大きな包みを詰め込むようなものだ。つまり、スタイルを損なうことなのだ」と書いた。本論文において、またこの雑誌の次号において、フェミニスト地理学者によるここ 10 年間の論文を筆者が展望する中で、われわれの目的はたんに地理学という外套のスタイルを損なうことではなく、洋服それ自体を新たにデザインし直すことにあると示唆したい。他の学問におけるフェミニスト研究者の目的と同じく、フェミニスト地理学者の目的は、アカデミック地理学と呼ばれる知の総体に関わる本質や構築に異議を申し立てることである。これはひとつの大胆な試みであり、そしてわれわれがまだ部分的な成功しか収めていない試みである。学問の言説に影響を及ぼす権力構造は、これまでさほどフェミニストから批判されてこなかった。しかし、変化がみられるようになりつつある。現在多数の国において、アカデミック地理学の学会は、ジェンダー問題の研究に関心を抱く研究者のフェミニスト機関や研究グループを有している。最近本雑誌は、フェミニストの立場に立った多くの論文だけでなく、

フェミニスト地理学やその関連研究についての年間展望を載せ始め (Bondi, 1990, 1992)、それはこの雑誌に限った傾向ではない。変化のもうひとつの兆しは、小さなことだが、とくに学部生のカリキュラムの中で見受けられるようになってきたフェミニスト理論や問題に言及するコースの増加である。さらに、いくつかのフェミニストの成果を包括し、またそれとまったく同じではないが、少なくとも女性を地理学の対象と見なすようなコースも存在する。

女性の地位に関する問題を初めて取り上げた論文が地理学の学術雑誌に掲載されて、10年以上が経つ。ジェンダー問題を議論した最初の論文は、おそらく 20 年前の『アンティポード Antipode』に載ったものであろう (Burnett, 1973)。しかしながら、フェミニスト地理学が気まぐれな好奇心以上のものとなり、地理学のカリキュラムの中に確固たる地位を築きあげたのは、1980 年代に入ってからだった。地理学の構築や細分化に寄与する差異に関する初期の認識に加え、Hanson and Monk (1982) の論文「人文地理学から半分の間人を排除しないことについて」は、女性を地理学の対象に含めることについてとりわけ影響力の大きな異議申し立てであった。その 2 年後、イギリス地理学会 Institute of British Geographers の「女性と地理学研究グループ Women and Geography Study Group」の 9 名は共同で、

* ケンブリッジ大学 ** 摂南大学

『地理学とジェンダー Geography and gender』(WGSG, 1984)を刊行した。この本は、フェミニズムにまつわるいくつかの概念や地理学者に関連するフェミニズムの概念を学生たちに紹介するための、学部生向けの初めてのテキストであった。こういった初期の探求的な教科書を出発点として、地理学者の多くは、先進工業国や「発展途上」社会において、都市や農村において、詳細な事例研究と集計的な分析によって、広範囲のジェンダー問題を検討し始めた。しかしながら、10年を経過すると、階級や「民族」についての地理学的分析と同じように、ジェンダーが重要な社会的区分であるという初期の確信は疑問視されるようになってきた。フェミニストの哲学的かつ理論的分析に加え、黒人のフェミニスト研究や人類学的研究によって、またジェンダーに関連した地理学研究が発展することによって、さらにその後のポスト構造主義者によって大きな影響を受けることによって、フェミニスト地理学者は、女性が共通した経験を持っているという初期の仮定に懐疑的になってきた(McDowell, 1991a)。Monk and Hansonの論文で示された確信は、「女性」というカテゴリーそのものに対するためらいへと次第に置き換わっていった。

研究の新たな局面が見られ始められてはいるものの、フェミニスト地理学全体がもたらした影響やフェミニスト地理学の仮説・憶測、またフェミニスト地理学の地理学全体に与える影響を評価するには、ひとつの適切な時期であるように思う。そこで、この雑誌に掲載される2論文は、1980年代についての回顧を行なうとともに、今後のフェミニスト地理学(の見解)に対して可能な見通しを提供するものである。とくに本稿では、すでにこれまでにこなされてきたことについて述べ、次稿では、今後行なわれるべき研究についてそのアウトラインをおもに述べることにする。2つの論文は、共通かつ二重の目的を持っている。

第1の目的は、既往論文の目録案内を行なうことである。この案内は、地理学教室に籍を置いてフェミニスト/ジェンダーの方法論を採用する教員や学生に対して資料として役立つ。地理学的な問題に対するフェミニストのアプローチは、われわれの学問において相変わらず立場が弱いけれども(そして、『地理学とジェンダー』を改訂して出版する必要があるが)、ここ10年間に出版されたフェミニストの著書や論文の包括的文

献目録を学生がまとめることは、非常に難しい。

第2の目的は、フェミニスト地理学の知的発達史を評価し、フェミニスト地理学の将来的発展のために見取り図を提示することである。ここでの目標は、フェミニストと定義された、あるいは自分自身をそう定義する一連の地理学者の関心の移り変わりを明らかにするために、広義のフェミニスト研究における発展を人文地理学の注目や関心と関連付けることである。ここ10年間に(わずか10年で)、地理学におけるフェミニストのアプローチは大きな躍進を遂げ、今日の研究は初期の頃よりもより一層洗練されてきた。しかし筆者がすでに指摘したように、1990年代の初頭まで、フェミニスト研究の有効性について80年代ほど自信が持たず、楽観的になれなくなった。初期の研究は、現在刊行されている論文に比べれば理論的にもさほど洗練されてはいなかったが、研究目的に対する大きな自信に特徴があった。「現実」の世界に加え、学問の世界においても男性支配に挑戦する女性の連帯的な試みは自明のものとして、またわれわれ女性間の差異については何ら意識することがなかった。皮肉なことに、論文刊行の増加、ジェンダー問題に関する会議の開催、重要な学会の人物によるフェミニストの言説に対する言及など、学問としての受け入れを示すものが増えるにつれて、フェミニストの目論見は崩れつつあるように思われる。このように、ジェンダーの差異に関する理論的基礎について、フェミニスト研究者の間で相違が見られる。あるひとつの分析カテゴリーとしてのジェンダーの有効性について、懐疑を抱いている研究者も一部にはいる。次稿で述べるつもりであるが、近年では、かつての自明の枠組みを脱構築し、われわれの間の差異を理論化する方向へと進んでいるが、フェミニストの間での批判的議論は、学問的・政治的な営為としてフェミニズムの崩壊を示しているのではなく、むしろ理論的かつ政治的な成熟を示しているのである。このことは、むしろ知に対するわれわれの欲求を強めるであろう、と筆者は信じるのである。

II フェミニスト地理学の定義

ここ10年間のフェミニスト地理学と三つの認識論的見方の変化を明らかにする際に、まず地理学側の見地から、次にフェミニスト側から検証し、続いて本稿

の後の部分でこの両者を統合したい。展望を行なう研究について読者が強調点や欠落点を理解できるよう、筆者もその議論の中に自身を置くことにする。

1 フェミニスト地理学

地理学の一分野として、われわれの学問におけるフェミニストのアプローチは、地理学他の領域と同様の中心的概念を採用している。したがって、10年以上、フェミニスト地理学者は地理学の中心的な三つの概念、すなわち空間、場所、自然と、それらが種々の社会における性的分業構造の中に包含される様式、あるいは自然の場合には、自然それ自身がジェンダー化される様式に注目してきた。したがってジェンダー地理学は、世界におけるジェンダー関係と女性の地位にみられる空間的差異に関する研究を様々な形で進んできた。つまり、ある特定の環境や場所におけるジェンダー化されたアイデンティティの関係や社会的構築の特殊性、「自然」の定義や社会的構築のジェンダー化された「差異」と関連づけられる様式を研究してきた。地理学における他の分野と同様に、強調点がここ10年の間に変わったのである。後でふれるように、最近の10年間でフェミニスト地理学は、空間行動や活動パターンにおける性差による分析から、ある特定の場所におけるジェンダー化された存在の社会的構築に関心を向けるように変わっていった。

フェミニスト地理学にとって、その学問的位置に関するひとつの結論は、少なくとも初期の段階では、他の学問において一層中心的に活動しているフェミニスト研究者によって確立された一連の知や理論を統合したり、具体的状況に適用することの重視であった。それゆえ、他の学問領域で確立された問題やアプローチは、フェミニスト地理学においては地理学他の領域と同じように、われわれの総合的あるいは全体的な「地理的想像力」の一部となった (Harvey, 1990)。フェミニスト理論に依拠する社会学者、経済学者、歴史学者、政治学者とともに、われわれフェミニスト地理学者は、「労働」というごくあたり前の概念に対して批判を加え、これらの学問を構築した生産/再生産、公的/私的といった区分を明示的にさせた。フェミニスト理論家である Carole Pateman and Elisabeth Gross (1987) によって編纂された興味深い論文集では、社会科学の領域を横断するフェミニストの関心が、それぞれの学問

を構築した同様の概念に対する批判という点で、きわめて類似していることを明らかにした。不幸にして地理学は、彼女たちの論文集には含まれなかった。

しかしながら、地理学と他の領域のフェミニストとの間の関係は、一方通行だけではなかった。空間の不平等性や地理的差異の重要性や場所の特殊性が社会的過程に影響を及ぼしたり、あるいは影響を受けたりする様式を彼らが無視していることは、最近10年、例えばフェミニスト社会学者やフェミニスト経済学者にとって次第に明らかになってきた。別のフェミニストは、例えば人類学者がその典型例であるが、たんなる「コンテキスト」として場所を捉えるのではなく、「フィールドにおいて」つねに研究を重ね、また性差の形成に果たす「場所」の役割にもっと敏感であった (Moore, 1988)。

1980年代末までに、社会科学は互いにより接近し、他の社会科学から地理学を識別する総合的/本質的という区別は、今や明瞭ではなくなっている (このような区別を的確にまとめている Massey の序文を参照のこと; Massey and Allen, 1984)。その結果として、「地理学的」研究の境界を決めたり、識別することがより困難となった。ジェンダー関係に関わる「地理学」について最近とくに興味を惹かれる研究のいくつかは、学問的な帰属に関して自らを社会学者と定義する人々によって行なわれてきた。例えば、「ランカスター」学派の研究はその好例である (Bagguley, 1990; Murgatroyd et al., 1985 を参照)。同じように、開発途上国のジェンダー、熟練、賃金労働に関する開発経済学者の研究も、学問の明確な境界に両足を突っ込んでいる。Diane Elson and Ruth Pearson の研究 (Elson and Pearson, 1981, 1989; Pearson, 1986) は、ひとつの典型的な例である。また、ある学問領域に属するというよりも、フェミニズムあるいは「第三」世界問題に主たるアイデンティティを持った研究者の手による分析は、地理学者に無視されるはずのものではない。フェミニストの闘争に関する「地図」について興味深い章を収録した Mohanty et al. (1991) による最近の論文集は、詳しく検討するに値する。

地理学に対するなわばり意識をまったく持たず、今や当たり前となりつつある学問領域にまたがる研究を謳歌しているため、複合的/学際的な学問としてのフェミニズムの隆盛が問題となるのは、拡大する研究領

域を展望する立場の人間としてだけである。展望という筆者の課題に対して何らかの境界領域を設定し、また、かなり長いこの論文の焦点を絞り込むために、主として地理学者と自認する人々の研究、すなわちイギリス、北米の主要学術雑誌や『アンティポード *Antipode*』に掲載された研究だけに展望を限定した。筆者はまた、現代の先進諸国社会における問題を扱っているフェミニスト研究者におもに注目した。十分な理由ではないが、それは筆者自身の研究の関心が都市社会地理学の領域にあるためである。筆者は、開発や環境の分野における議論を展望するほど有能ではない。ただし、開発については若干は言及するつもりである。ジェンダーと開発に関する文献をサーベイしている二冊の有益な書物の存在もまた、本稿での筆者の怠慢を一部免じてくれている (Brydon and Chant, 1989; Momsen and Townsend, 1987)。環境の分野に関しては、フェミニスト地理学者は比較的わずかな影響しか及ぼしてこなかった。けれども皮肉なことに、もっとも興味深かつ特殊な地理学の問題が提起されるのは、おそらくこの分野である。Margaret Fitzsimmons (1989) による挑発的論文は、自然についての論争を巻き起こした。ただし、その議論は持ち越されたままである。

筆者自身の研究や政治的共感、社会主義フェミニズムと呼ばれる立場にあり、それはラディカルフェミニズムとは区別される。ただしこの区別はこの10年間にさほど適当ではなくなってきた。したがってこの展望論文は、ある特定方向に肩入れしている。もっとも後に述べるように、英語圏とくにイギリスの地理学者は、この視角から研究を行なう傾向がある。それゆえ、こうした傾向は一人だけではない。最後に、非英語圏のフェミニスト地理学者たちによる現在の研究の進展について、筆者は適切な知識を持っていない。

『高等教育における地理学 *Journal of Geography in Higher Education*』の最新号には、地理学における女性の位置に関する展望が含まれており、様々な国々の力点の違いを示している (Peake, 1989; Garcia-Ramon, 1988 も参照)。加えて、国際的なコンテキストにおける女性に関する新しい地理学シリーズのある巻で、Momsen and Kinnaird (1993) は、様々な国で研究を行なうフェミニスト地理学者の関心が異なっていることを示した。

2 フェミニスト地理学

場所、空間、自然への関心が地理学者を結びつけているのに対し、これは、フェミニストの分析に対する指針としてあまりに特色の薄いテーマに留まっている。当初、フェミニストにとって研究の目的は明確であるかのように見えた。すなわち、女性の生活、経験、行動に関する研究である。他の社会科学においてもそうであったように、地理学における初期のフェミニストの批判は、その学問の中に女性がいなかったことに対する不満から生じた。おもに男性によって教授され (McDowell, 1979; McDowell and Peake, 1990; Momsen, 1980; Zelinsky et al., 1982)、個人と企業の空間選択や行動 (合理的な経済人?) に着目していたため、1960年代 (ないしそれより以前) のテキストに描かれた地理景観には、ジェンダーの視点がなかった。世帯の意志決定が住宅立地論の中にモデル化され、インナーシティにおける都市貧困者の空間的分布が描かれるが、態度や行動に関する性別の差異や、空間的分布の背後にある差別的な権力関係には関心が向けられなかった。たとえジェンダーが考慮されていたとしても、それはたんなる追加的な変数に過ぎず、地理学理論のジェンダー的性質、例えば公的なものと私的なもの間の自明とされている区別に対して、何ら異議が唱えられなかられゆえ「フェミニスト」地理学は、世界の諸地域の女性や彼女らの活動について、新たな知識の構築を当面の課題として取り上げ、その中心は、集団としての女性の生活が、いかに男性のそれと異なるかについてであった。力点が置かれた主要な性差のひとつは、空間的に制約された女性の活動範囲であることから、この研究のほとんどはローカルなレベルで行なわれた (Tivers, 1979, 1985)。けれども、女性の地位や位置に関する国際比較も行なわれた (Seager and Olson, 1986)。

ところが、他の社会科学におけるフェミニズムの影響について展望した研究者ら (Boxer, 1982; Maynard, 1990; Moore, 1988) が力説したように、「女性を加えてかき混ぜる」方法の限界は、(比較的) 早い時期に明らかとなった。地理学におけるセクシズムの問題は、地理学研究者の男女別構成や地理学の研究対象に関してそのジェンダーに盲目なことに原因があるのではなく、理論レベルや分析レベルに原因がある。Henrietta Moore がフェミニスト人類学についての彼女の展望に関して述べているように、フェミニスト地理学者は自分たちが「理論を再検討し、再定義するというより大

きな問題に直面している」ことに気づいた。「Moore のテキスト」(および、実際には他の人類学者の研究、とくに Micaela di Leonardo, 1991 の編集によるもの)は、より深い意味で地理学者にとって有益であった。場所の特殊性や性差の形成におけるその重要性に対するフェミニスト地理学者とフェミニスト人類学者の共通の関心は、地理学者が、ジェンダーの定義やジェンダー化されたアイデンティティ、つまりわれわれの研究の範囲を拡げるのに役立った。Moore のテキスト『フェミニズムと人類学 *Feminism and anthropology*』の中で、彼女はフェミニスト人類学をつぎのように定義している。「女性であるということはどういったことか、『女性』のカテゴリーの文化的理解は地域や時代によってどれほど異なっているのか、またこれらの理解は異なる社会での女性の位置にどのように関係するのか」(Moore, 1988, p. 12)。この目的は、ジェンダー化された関係への考察に依拠しており、Moore が述べるように、ジェンダーはふたつの異なる見地から理解されるだろう。ただし、それらは互いに相入れないものではない。「ジェンダーはシンボリックな構築として、または社会的関係として理解されるべきだろう」(p. 13)。

筆者が思うに、彼女の定義はフェミニスト地理学の範囲の規定としても、同様に適切である。しかし、おそらくフェミニスト人類学のもっとも顕著な貢献がジェンダーというシンボリックな構築についての分析であったのに、フェミニスト地理学は表象の問題よりもむしろジェンダー化された社会的関係や「現実の」物質世界の中での社会的関係だけを最近まで重視してきた。実際、フェミニスト地理学者は、「女性」のカテゴリーの文化的構築を軽視する傾向にあった。ほとんどすべての研究において、「女性」のカテゴリーは理論化されることはなく、むしろ自明のものとされてきた。空間的な差異が見られるため、そのおもな力点は社会的関係や諸活動に置かれてきた。このことは、社会主義フェミニズムの変種が英語圏のフェミニスト地理学に及ぼした強烈な支配を反映している。その理由は、地理学において1970年代および1980年代の「ラディカル」な伝統、とくにマルクス社会理論に参画した研究者が近年まで影響力を保持してきたからである。社会主義フェミニズムのひとつの結論は、経済のフォーマル部門の賃金労働と、家事労働/賃金労働の空間的分断の意味への注目であった。しかしこれ以外の注

目もまた、他の伝統や他の地域において重要であった。例えば、ドイツ語圏の地理学者は環境問題への関心を表明し、オランダの地理学者は都市計画や都市デザインの問題に、「第三」世界諸国の女性地理学者はインフォーマル部門や農村開発に関心を表明した (Peake, 1989)。しかし地理学全般、あるいは少なくとも社会文化地理学におけるのと同様に、フェミニスト地理学者はその後、表象や意味についての問題に取り組むようになった (Penrose et al., 1992 を参照)。フェミニスト地理学者もまた、ジェンダー関係の第三の側面を研究し始めた。科学や方法論的問題に対してフェミニストのアプローチを主張する著名な Sandra Harding は、ジェンダーがふたつというよりむしろ三つの次元を有していることを示唆した。すなわち、労働の社会的・性的分業 (Moore は社会的関係と呼ぶ) とジェンダーシンボリズム、個人のジェンダー化されたアイデンティティの構築過程である (Harding, 1986)。ジェンダー化されたアイデンティティに関する場所やローカリティの重要性の検討は、フェミニスト地理学の今後の課題となった。

Ⅲ フェミニストの系譜?

研究展望を行なう場合、系譜的な展開とか、整理され議論の余地がないとか、時代が下るにつれて洗練度が高まるといった印象を与えるのは難しいことではない。地理学であろうと他の学問領域であろうと、フェミニストの思想の歴史は上述のような型に当てはまらず、むしろ同時代に存在し競合する見解との間で、論争、矛盾、併存がみられた。今日のフェミニズムは、多様かつ多元論的な企図である。こういった留保を置かなければならないものの、系譜的な分類上の枠組みは、フェミニスト研究者の論点やコンテキストの変化を理解するうえで役立つ。ただし、筆者一人がこのような系譜の作成を試みているのではない。例えば Sandra Harding (1986) は、フェミニスト経験主義、スタンドポイントフェミニズム、ポストモダンフェミニズムに3区分している。Donna Haraway (1991) は「相対的關係によって位置づけられる知 Situated Knowledges」についての最近の刺激的な論文の中で、この区分を利用した。Nicholson が編者となった『フェミニズム/ポストモダン *Feminism / postmodern-*

ism』(1990)への寄稿者の多くも、同様の三つの系譜的分類を採用した。例えば、Di Stefanoは、HardingやHarawayの3区分とほぼ対応する、合理主義者フェミニズム、反合理主義フェミニズム、ポスト合理主義フェミニズムに区分した。筆者は、本稿と次稿の系譜を作成するために、HardingとDi Stefanoの3区分を組み合わせた。三つの段階あるいは見地のそれぞれにおいて、ジェンダー関係について異なる局面が関心の的となる。したがって、フェミニスト経験主義では社会的関係—Hardingの用語では労働の社会的・性的分業—が主要な研究領域であり、スタンドポイント/反合理主義者の見地からは、ジェンダーシンボリズムやジェンダー化されたアイデンティティの構築に関心が向けられる。ごく最近では、フェミニストとポストモダニストの関心が一致するようになり、大きな注目を浴びているのは個人のジェンダー化されたアイデンティティである。本稿は、時には強引かもしれないが、筆者が第1の見地に分類した研究を展望する。スタンドポイントフェミニズムとポストモダンフェミニズム、シンボリズムやアイデンティティの研究については、次稿に持ち越す。

IV 実証を重視したフェミニスト地理学

ここ10年間にフェミニスト地理学によって試みられた多数の研究をこのカテゴリーに分類することで、筆者は、それが劣っていたり理論的に不適切であると暗黙に考えているわけではなく、実際それとは大違いである。むしろ、「第2段階」のフェミニストに先立つ合理主義としての第1段階(1960年代以降に行なわれた研究が、今世紀初頭の婦人参政権運動の理論や政策から区別されるように)という、Di Stefanoの説明が適切である。つぎの文は、フェミニスト地理学者による初期の多くの研究に潜んでいる合理主義者の観念を、どのように彼女が定義しているかを示している。

合理主義者の立場は、その表現や出発点において、合理性やヒューマニズムといった啓蒙主義的な見方を採用する。この見方によれば、共通の点がすべての人間に当てはまるのは当然である。なぜなら、人間は合理的だからである。合理性に関する人間の能力こそが、丁寧な扱いを受けていない自然とわれわれとを識別する。女性は、男性に比べ理性に欠けるうえにより自然的に近いという陰險な仮定のもとに、人間として当然与えられるべき尊

厳を受けてこなかった。「差異」は女性に対する不平等な扱いを正当化するために用いられてきたが、それゆえ、社会において女性が正当な場所を得られるよう、理論的にも実践的にも差異を拒否しなければならない

(Di Stefano, 1990, p. 67)

このように、初期段階におけるフェミニスト地理学の目的は、地理学やもっと一般には賃金労働や政治といった「公的」領域から排除された女性の不平等を示すことであった。つまり、女性が自然により近いという主張に見られるような女らしさの明確な特徴である「自然らしさ」ではなく、その社会的構築を示すことである。このことに関連して、土地利用の変更や保育施設など、社会のフルメンバーとして女性が自分たちの正当な場所を獲得することを可能にする政策を主張した。この研究を広く地理学のコンテクストの中に位置づけることが重要である。なぜならそれは、ヒューマニズムやモダニズムが広く地理学に浸透し、人種差別、帝国主義や貧困に対する闘争と並行しながら、平等の権利という言葉の影響が重要になった時代だったからである。例えば権利という言葉は、学術雑誌『アンティポッド *Antipode*』に代表される「ラディカル」地理学と、主流派であった都市社会地理学の「人文主義的」アプローチの両方に浸透していた(Ley, 1983)。

フェミニスト地理学研究の大部分、少なくとも1980年代半ばから末までの研究は、三つのカテゴリーの第1番めに該当するけれども、本稿では、研究を完全に網羅しようと試みるつもりはない。ここではむしろ、主として労働の性別分業や空間的分業、都市環境、ジェンダーや労働、家庭に関する研究に注目し、これらの分野で研究を進めているフェミニスト地理学者が提起した鍵となるテーマや問題を取り上げようと試みる。

1 女性の地位の空間的差異

女性に対する男性の理解の欠如という中心的課題が初期の研究を貫いており、分析者はたとえどんな空間スケールであってもこの問題に注目している。したがって、女性の不平等や男性への従属の程度を検討する多くの研究が1980年代を通じて行なわれた。このような従属状態と、現代世界における彼女たち(われわれ)の地位の地理的多様性を地図化することは、地理学においてフェミニストが行なったもつとも地理学的な研究であろう。Seager and Olsonによる1986年出版

の世界地図『世界の女性 *Women in the world*』や、今は絶版となって残念だが、世界的な統計資料の欠如の問題や、統計の不適切さ、比較不能、重要な尺度基準の欠如といった問題に取り組んだユニークな試みである。女性の活動、とりわけ無償労働の不可視性や過小評価は、国民勘定や全国統計が性別的な偏見に満ちたものであることを意味する (Waring, 1990 も参照)。Seager and Olson (1984) は、その当時に入手可能なデータを比較対照するという困難な課題をなし遂げた。その結果作成された地図は、国ごとの生活水準に依然として大きな格差がみられるものの、「どこにおいても、女性は男性よりも劣った地位にある。女性には権力がなく、自立性に乏しく、多くの仕事をこなさず、金がないうえに重い責任を負っている」という著者の言葉を地図で説明している (p. 7)。

様々な空間的スケールで別のタイプの研究もこうした「不平等な権利」の視点から行なわれ、様々な地域に広がる女性の従属について地図を作成するのに役だった。Holcomb et al. (1990) は、アメリカ合衆国における女性の権利に関する地理学 (州立法の差異) を分析した。一方、Jones (Holcomb and Jones, 1990) は、黒人女性が世帯主である家庭の貧困について、州間格差を検討した。イギリスでは、Duncan がもう少し小さな空間スケールで性別に起因する差異を地図化した。彼は 1981 年のグレーターロンドンを対象にした国勢調査データを用い、家族や世帯構造の空間的差異や、女子労働力率の空間的分布を明らかにし、資本主義のもとでの社会階級や人種の空間的分布に関するよく知られた生態学的研究と比較した (Duncan, 1989)。彼は、イギリスにおける女子労働力率に関する国勢調査データについても類似の統計分析を試みた (Duncan, 1991)。

これらの空間的・地図学的研究は、女性の抑圧についての理論的分析に確固として位置づけられるのではなく、研究の性質からして示唆的で記述的な傾向がある。他の地理学者は地図よりも文章によって、女性の生活水準や日常生活における国ごとの差異に関するわれわれの理解を深めた。Momsen and Townsend の『第三世界の地理学とジェンダー *Geography and gender in the third world*』(1987) —Women and Geography Study Group の後援によって出版された 2 冊めの教科書—は、女性の不平等に関する理論に基づいた分析をまとめた画期的な試みであり、巻頭の編者の主張に始まり、種々

の国における女性の地位に関する一連の実証的な事例研究がそれに続いた。Brydon and Chant 編の学部生用テキスト『第三世界の女性 *Women in the third world*』

(1989) もそれと類似した比較を目的としたものである。このテキストは、農村の生産活動、開発政策、農村—都市間の人口移動、都市の生産活動、再生産と政策に関する研究の概要をまとめた有益な参考資料である。こういったタイプの研究は、男性と比較した女性の生活水準の明白な差異を示すというきわめて重要な役割を果たしている。けれども、総合的かつ空間的視点のためにおそらく避けられないのだろうが、それらの研究にはいくつかの欠点もある。第 1 に、先進国—発展途上国という指標に基づく研究は、西欧そして暗に男性の指標にあまりにも依拠しすぎている。Chandra Talpade Mohanty は、彼女たち (ヨーロッパ系白人) の注目する「先進」の指標が、「女性の生活に関わる現実、差異、共通性を隠蔽している」として Momsen and Townsend を批判した (Mohanty et al., 1991)。Mohanty は、これらの「客観的」指標が、「西欧・白人 (つまり進歩的・近代的) 対非西欧 (つまり後進的・伝統的)」という階層性に基づいており、第三世界の女性を時間、空間、歴史の中に固定化しまう」ので、彼女らの日常生活の複雑性を否定していると指摘する (p. 6)。例えば高い出生率は、女性抑圧の原因となるだけでなく、女性にとって誇りや地位の根拠となることもある。第 2 に、初期の国際比較研究のいくつかは、例えば国際分業の変化などに関する全般的な理解という点で、異なる地域間での女性の相互依存関係をほとんど分析していない。このタイプの比較分析こそが、ジェンダー関係のグローバルな過程とローカルな差異とを結びつけ、ジェンダー関係の「不均等発展」に対してより優れた理解を促進するもっとも有望な方法を提供すると思われる。

そういった試みは、他の分野とくに開発経済学ですでに開始されてきた。「敏捷な指が安価な労働者を生み出す」という Elson and Pearson の初期論文 (1981) は、今や女性と開発に関する研究では代表的なテキストである。その後 Pearson (1986) は、先進国の生産活動と第三世界の生産活動における女性の地位とを結びつける新国際分業の概念について、重要なフェミニスト批判を展開し、また、彼女の敏捷な指先に関する論文を振り返っている (Pearson, 1991)。しかし、西欧

フェミニストの開発専門家の研究は、第三世界の女性に及ぼす賃金労働の影響に関して民族中心主義的な仮定をしていると批判されてきた (Lim, 1992)。事実 1980年代を通じて、とりわけ有色女性からの民族中心主義 (そして中産階級の仮定) に対する批判が次第に目立つようになった。この点に関しては、筆者の第2論文で再び取り上げるつもりである。

2 ジェンダーと場所：女性と都市環境

合理主義フェミニズムのもっとも強い異議申し立てのひとつは、生活の公的領域から女性が排除されていることに向けられた。それは、家庭や出産、およびそれにもなる再生産のあらゆる無賃労働と女性との「自然な」結びつきによって正当化されたものだった。公的領域と私的領域のこのような空間的分断は、フェミニスト地理学者にとってもっとも理想的なテーマだった。家庭は女性の領域であるとする仮定に挑戦すべく、相当の努力が払われた。公的—私的の区別や、とくに西欧都市における土地利用パターンへのその影響は非常にはっきりしているのも、それは、都市問題に興味を抱くフェミニストにとって主要な論点となった。西欧における 19 世紀の大規模な工業的都市化と、今世紀の世界都市への農村—都市間人口移動や国際的人口移動は、ジェンダー関係を再構築し、フェミニスト地理学者にとって恰好の題材となった。したがって、おもにアメリカとイギリスの性別分断と都市生活の分析に限定したにもかかわらず、この節の記述は分量が多くなっている。

多くの学部生用テキストの定義によれば、都市地理学は賃金労働を除いて、住宅生産から余暇活動に至る都市内のあらゆる社会的過程を含んでいる。ただし、賃金労働だけは経済地理学に含まれている。もうひとつの例外は、路上レベルよりも小さな空間スケールで生じる社会関係である。事実従来の定義では、人文地理学は全般的に公的活動だけに關心を向けてきた。それゆえ、他の社会科学と同様に、地理学は公的—私的という啓蒙主義的区別と、これら領域の間の暗黙的結びつきを当然と見なしている。

もちろんこういった除外や関連性は、フェミニスト研究者のもっとも緊急ないくつかの問題が、都市地理学から早々に消えてしまうことを示している。例えばそれは、工場制生産システムによる日常生活の再編成

のもたらす問題や、人口移動や工業的都市化のもたらす世帯と家庭生活の再編成の問題である。フェミニスト地理学の重要な成果は、そうした排除の不適切さを明らかにし、経済の再編や都市内の空間分化の変化のどちらも、他方を抜きにしては十分に説明できず、ジェンダー関係の考察なしには説明できないことを示したことである。このように、都市問題を研究するフェミニストは、地理学の専門を定義し直すのにかなり影響を及ぼしてきた (この議論については、Hanson and Monk, 1982; Bowlby and McDowell, 1987; Pratt, 1990 を参照)。

現在では、女性やジェンダー関係、都市に注目した研究がかなりある。それらの研究の多くは、多かれ少なかれ記述的である。それにもかかわらず、意志決定、通勤距離、最適立地研究など、これまで地理学のテキストの中を闊歩する性別のない登場人物に対する重要な反撃となった。彼らは、選択を行ない、通勤し、住宅を探索し、通りをぶらつくのだが、いつも例外なく男性の行動パターンをとる傾向があった。ギャングや都市の群衆、浮浪者、政治運動家、無神経な表情の都市通勤者は、乳児や乳母車、週末の買い物に煩わされることは決してなかった。これらの研究は、その大部分が都市であり先進国である多くの地域に関して、以下の点を明らかにした。すなわち、女性の大多数は男性以上に空間的に制約を受けた生活を送っており、所得も低く移動距離も短かく、もし勤めているならば通勤距離は短い。そして、空間的に分離していることの多い都市の諸施設 (しかし時間的にはすぐ到達できることが必要) を束ねるうえで不可欠な「つぎはぎの」労働を行なっている。1970年代におそらくもっとも影響力を持っていた都市理論家である Manuel Castells (1977) は、つぎのように考えていた。

結局のところ、そのシステムが依然として「機能している」のは、女性が無償で送り迎えを提供し…、家を修繕したり、食堂がない時に食事の用意をし、買い物に時間をかけ、子守りがいない時には他人の子供の面倒をみたり、社会的な空白が生じたり文化的創造性がない場合には、「無償の慰め」を生産者に提供しているからである。仮に、「何もしていない」これらの女性が、「そのことだけ」でもするのを止めたら、われわれの理解している都市構造全体は、その機能を維持することが完全に不可能となるだろう (Castells, 1975, pp. 177-78)。

この引用は、多くの理由で興味深い。女性は、(いうまでもなく) 男性の生産者に「無償の慰め」を提供している! とする彼の考え方が面白いだけでない。もっと重要なのは、Castells が、他の専門領域から都市研究・都市地理学を識別する明白に都市的な「科学的対象」を定義しようと試みている点である(これは、個人の「主体」の生活が「構造」分析の中に埋もれていた都市研究・都市地理学の「アルチュセールの時代」であり、それは考えていたよりもおそらく長続きした)。都市地理学にとって明確に都市的なことがらとして彼が規定したものは、都市の「必須」の機能と見なされる財や資源の国家による(集会的)供給の分析であった。この分析は、女性による無償の家事労働やコミュニティ労働を無視しただけでなく—それはさほど珍しいことではなかった—、イギリスやアメリカにおいて1970年代末頃に登場した右派政府による大規模な国家社会政策の削減を読み誤っていた(McDowell, 1989a)。それゆえ、都市機能の維持における女性の無償労働の重要性は、Castells が考えていた以上に大きくなったが、フェミニストだけでなく、都市地理学者にとっても非常に興味深い問題を提起しつつあるのは、女性の家事労働と賃金労働との相互関連であることも明白となった。

女性が無償の時間を費やしてつぎはぎの都市施設を繕わなければならない理由は、西欧都市の土地利用パターンがかつての時代の家父長制的仮定を反映しているからである。つまり、女性は家庭の天使であって、おそらく森や郊外の環境の中での生活に拘束されており、一方男性は、都心の喧騒の中で騒々しい公的生活に参加し、感情的かつ性的慰めを求めて家庭に帰宅し、引き続き労働の準備のために温かい食事を取る。

3 家父長制的権力：都市の土地利用パターンと建築デザイン

都市地理学者は、都市の土地利用パターンの背後にあるジェンダー関係や権力関係に対して驚くほど盲目であり、工業的都市化による空間構造を「自然の」状態として受け入れた。さらに、社会階級とジェンダー、土地利用の点で多様性を持ち未分化な前産業型都市が、「収斂」モデルという帝国主義者の仮説に従っていつかそうなると考えた。先進工業国の現代都市が、伝統的な性別分断をコンクリートとレンガと鉄で具現して

いることは、きわめて明白と思われる。Harman はオーストラリアの事例をもとに、「資本主義・家父長制・都市 Capitalism, patriarchy and the city」という刺激的な展望論文の中で、つぎのように述べている。

都市は、妻でありかつ母であるという伝統的役割に女性を縛り付けるように形成された。郊外は、明らかに家族のために作られたものである。多くの女性にとって就業機会は乏しく、公共交通はピーク時の通勤者に合わせて作られているので、女性が郊外と郊外の間を移動することは困難である。回転ドアが設置された公共の場所は、乳母車を押した女性を「身体障害者」にする(Harman, 1983, p. 104)。

「男性が作った環境 the man-made environment」という用語は、Matrix (1986) の編集した本(フェミニストの都市計画と建築に関する論文集)の副題である。フェミニスト地理学者、デザイナー、建築家は、「男性が作った環境」の中で生活するようになった由来、歴史、その帰結を報告した。工業的都市化、とくに19世紀半ば以降のイギリスやアメリカにおける郊外の急成長(それは、今世紀における自家用車所有率の上昇によって著しく加速化された)によって発達した職住の空間的分離という典型的なパターンは、工業化の必然的結果でもないし、変更不可能でもないという事実が、第二次世界大戦後のオレゴン州ポートランドのニュータウンに隠されたデザイン原理の興味深い把握の中で述べられていた。

基本的計画から入居まで、10ヶ月を要した。プロジェクト担当の建築家は、疲労困憊している。デザイン計画に対する要求がこんなに多く、また、不可能とも思える工程で工事を進めねばならないこのような計画に、彼は今まで出くわしたことがなかったからである。彼は、多くの基本的な問題、とりわけ標準的な家族生活についてや、男性、女性そして子供についてなど、彼がこれまでずっと抱えてきた多くの考えを極めて短期間に検討せねばならなかった。この計画には、単身者、片親世帯、非家族グループなどを包括するようなあらゆるタイプの、そしてあらゆる家族規模の世帯に対して支払い可能な手頃な住宅をデザインすることが条件とされていた。…彼は、バスによる公共交通機関に重点を置くことも指示されていた。彼の住宅供給もまた、数ヶ所の保育施設と職場との関係に置かれねばならなかった。…大規模保育施設を24時間中、1週間休みなく開き、病気の子供のために付属の診療所を完備したり、帰宅後、母親が子供を入浴させなくてすむように子供用のバスタブを用意し、ま

た、子どものいる母親が温かいキャセロールを持ち帰ることができるように調理済みの食品サービスを行なった (Hayden, 1983, p. 7)。

1943年にその町は、産業家である Henry J. Kaiser の所有する造船所に働く既婚の女性従業員を住ませるために作られた。したがって、その通称をカイザーヴィル Kaiserville という。しかし、この勇氣ある試みは長続きしなかった。1947年、その町は消滅した。核家族向けの郊外住宅という従来のパターンの(再)確立は、資本、国家、また戦後の主流をなす男性たちにとって、まさに時に適った解決策であった。家庭への女性の回帰は、男性に仕事を明け渡したのみならず、1930年代に確立され (Glucksmann, 1990)、1950年代に発展した軽工業の新製品需要を消費者に煽り立てた。専業主婦は、戦後の好景気の時期に、将来の労働力となる子供世代を育てた。また、郊外に居住するこれらの女性たちは、おもに白人で、十分な教育を受けており、初期段階では工業部門、後にサービス業における経済拡大にとって、有益な労働予備軍であることが判明した (Nelson, 1986)。付随的収入 (1950年代は小遣いと呼んだものだが) は、新しい消費者、戦後期における家庭重視の個人的ライフスタイルを熱望する多くの家庭にとって、不可欠な要素であった。

建造環境の構造そのもの(都市的土地利用パターンだけでなく建築物のデザインや配置)にも、ジェンダー化された仮定が強烈に刻み込まれている。住宅形態や公共建築物の構造は、ジェンダーや階級の区別に関する仮定を具現している。イギリスでは Matrix (1986) が、空間のジェンダー化を実証したり、その具現に見られる従来の仮定を批判するのに影響力を持ってきた。伝統的なアカデミック都市研究者を特徴づける実践と理論の乖離を克服しようとする他の試みもある。例えば、フェミニストの研究・資料センターである『女性デザインサービス *The women's design service*』は、興味深い学術雑誌 WEB を出版し、カナダでは、トロントのヨーク大学のグループもこれと類似した『女性と環境 *Women and environment*』という雑誌を発行した。Robert (1991) は近年、イギリスの公営住宅のデザインにみられる女性の地位に関する抑圧的仮定が、現在も継続していることを報告した。アメリカでは Leavitt が、『ミズ *Ms*』誌の調査を通じて、女性に固有な理想的生活環境そのものに矛盾があることを明らかにした。

回答者は、オープンスペースに囲まれた戸建て住宅を求めると同時に、都市的施設や友人、職場の稠密なネットワークへの容易なアクセスを求めており、それは両立不可能であった。残念なことにこの調査は公表されなかったが、Leavitt は、女性の労働、福祉、住宅形態の相互依存関係について一般論を発表した (Leavitt, 1991)。

他にも、女性の居住地選好や住宅形態の好みについて様々な報告がなされている。また、賃金労働に従事する人が増大し、マイノリティが高い地位を獲得するようになるにつれて、女性の間で発生しつつある格差を報告したものもある (Andrew and Milroy, 1988; Boys, 1990; Rose and Villeneuve, 1988; van Vliet, 1988)。しかし、ジェンダーと都市構造に関する研究に共通するのは、(不)平等と権利という言葉の背後にあるリベラルな仮定への信頼である。もし女性の従属的な地位が適切に示されれば、合理的な国家の政策や手段は、その改善に寄与するという幅広い認識が存在した。これらすべての研究は、理論的洗練の度合いは様々であるけれども、フェミニスト経験主義、あるいは経験主義フェミニズムという名称で括られる。都市地理学におけるこれと関連した諸研究は、年齢、階級、民族などに関する女性間の差異の重要性に注目しているし、もっとも重要なカテゴリーとしてのジェンダーの重要性に対して積極的に疑問を投げかけている。こうした認識は、(一部の)フェミニズムにおける合理主義からポスト合理主義へのスタンスへの移行、あるいは Harding の用語では経験主義的アプローチからポストモダンアプローチへの転換、を示している。したがって筆者は、反合理主義ないしスタンドポイント理論がフェミニスト地理学に及ぼした影響を評価する心積もりでいる次号の論文まで、そうした展望を持ち越す。つぎのふたつの章では、公的・私的領域の分断が女性の日常生活に対して持つ意味を検討した研究と、この分断の中心的概念およびその男らしさ・女らしさの領域への照射について展望を行なう。

V 不平等な都市：公的領域と私的領域の結合？

Roberts, Hayden, Leavitt によって十分に分析された都市デザインの原理とその家父長制的基礎は、妻あるいは母としての属性、加えて都市の特定地区に限定

されてはいるけれども本質的には私的領域に属する郊外の人間という属性を突き崩そうとする女性たちが、その他の仮説原理に支えられている都市そのものに立ち向かわなければならぬことを意味している。フェミニストの分析は、再生産の活動が完全に私的なものではないにしても女性の責務であるとする仮定から生じる不平等と、その結果女性が立ち向かわなければならぬ問題や不平等を解明しようとし始めた。賃金労働者かつ再生産労働者として、日常生活の中で公的領域と私的領域を結合させなければならない女性にとって、都市計画の矛盾は顕著である。

これらのうちでもっとも興味深い研究は、伝統的な女らしさのモデルに当てはまらないような都市居住の女性の直面する諸問題を報告している。単身女性（彼女たちが高級住宅に入居することは不可能なことが多い）の住宅問題は、彼女たちの総じて低い収入能力（イギリス女性の平均はフルタイム雇用ですら男性収入の75%以下である）の結果、また住宅のデザイン、間取り、立地場所だけでなく、ゲートキーパー（門番）の作り出すアクセス規則の背後に潜む家族の仮定の結果としても生じる（Watson and Austerberry, 1986; Watson, 1988）。イギリスの公営住宅は、入居の家族基準を満たさないという理由から単身女性の入居を拒否し、融資会社は直接的にも間接的にも女性を差別する。例えば Duncan の研究（前章を参照）は、インナーノースロンドンの一部の地域に単身女性がかかなり集中していることを明らかにした。単身女性たちにとって重要な賃貸住宅は、地域的にはインナーシティに集中するが、一人住まいの女性にとって安全なのはそのうちの一部の地域だけである。

都市における女性の恐怖や、それが1日の中で出かける時刻と活動の自由度に与える影響についても、研究の関心が寄せられた。それらの研究は、私的空間と公的空間に対する男性の差別的な規制が女性の行動に及ぼす影響や、女性が都市空間を利用する自由度の1日の中での変化を明らかにした（Pain, 1991; Valentine, 1989, 1990）。しかし、ジェンダーだけでなく性的指向もまた、恐怖からの自由や空間行動に影響を及ぼしていることは明白である。ゲイやレズビアンクラブ、バー、その他関連諸施設の空間的集中についての研究は、都市の特定地区が、とりわけゲイの男性にとって重要であることを明らかにした（Knopp, 1991; Lauria and

Knopp, 1985; Winchester and White, 1988）。そうした場所では、彼らのアイデンティティは脅かされないのである。都市政策や住宅供給を貫いているのは、女性そのものに対する差別というよりも、異性愛という前提や男性世帯主という伝統的な核家族観なのであり、それは都市の財や資源への不平等なアクセスに対する重要な説明要因となっている。

住宅政策、安全性、アクセスに関するこれらの研究に加え、様々な女性集団が建造環境の構造、配置、支配に影響を与え、また影響を受けている状況に関するわれわれの知識を広げるような研究が、1980年代半ば以降、地理学者によって多数発表された。筆者は他稿において、1980年代初期に発表された論文を展望した（McDowell, 1983）。それ以降、つぎのような論文が発表された。家庭の意味を問う論文（Madigan et al., 1990; Saunders, 1989）、住宅相続のパターンについての論文（Munro and Smith, 1989; Smith, 1990）、様々な女性集団（母子世帯、高齢者、専門職に就く裕福な女性）の居住地と、特定地区でのジェントリフィケーションとの関連についての論文（Bondi, 1991; England, 1991; Rose, 1989）、レズビアン女性やゲイ男性に関する研究や、彼らに固有な要求や需要が特定地域の住宅・商業供給に及ぼす影響についての研究（Castells, 1983; Fitzgerald, 1987; Lauria and Knopp, 1985）。さらに、保育施設の分布の格差や労働者階級と中産階級の母親にとっての利用しやすさに関する研究、通勤トリップと余暇、買物、学校・病院・その他の場所への子供の送迎に関するトリップの両方にみられる性差の研究（Pickup, 1984; Hanson and Johnston, 1985）、郊外あるいは鉱山企業城下町における女性の環境認知と選好についての研究もある（Gibson, 1991; Mackenzie, 1987）。

都市社会地理学におけるジェンダーに関するフェミニスト研究の全般的視野と焦点について、多くの展望論文が発表されており（例えば、Bondi, 1990, 1992; Bowlby and McDowell, 1987; Pratt, 1990を参照）、また、1980年代後半の人文地理学を再評価したり再形成しようと目指した多数の論文集の中で、ジェンダーを扱った章もある。これらの章は、ジェンダーの問題を概念化する興味深い方法を示している（例えば、Peet and Thrift (1989) *New models* 中の Bowlby et al., Mackenzie, and Pratt が執筆した章、Gregory and Walford (1989b)による *Horizons* の中の

McDowell が執筆した章、Kobayashi and Mackenzie (1989) *Remaking human geography* 中の Mackenzie が執筆した章を参照)。多くの編集雑誌も都市に注目した。例えば、Little et al.(1988)の『都市の女性 *Women in cities*』や、Bowby (1984, 1990)の編集による雑誌『建造環境 *Built Environment*』のふたつの特集号、Regulska (1991)の編集した『ジオフォーラム *Geoforum*』の最近の特集号などもある。これらの特集号もまた、少数の女性地理学者の大きな業績を示している。ただし、活動的な若手研究者がジェンダー問題に関心を向け始めたため、現在ではそうした傾向は薄れつつある。

フェミニスト地理学者は、「低開発国」における都市問題も取り上げ、貧困や生活水準、雇用の面から都市への女性の人口移動の原因と結果を調査したり (Chant, 1992; Moser and Peake, 1987; Radcliffe, 1990)、様々な生活水準の国々における農村地域の女性を調査した (Momsen, 1991; Whatmore, 1991)。さらに、おもに先進工業国の都市であるが、「第三世界」の都市に関しても、都市支配地方政治のフォーマル組織とインフォーマル組織への女性の参加も、フェミニスト都市地理学の重要な研究領域となってきた (Fincher, 1988; Marston and Saint-Germain, 1991)。市民たる資格についての概念的考察や「私的」領域に置かれていることを理由にした女性の排除の問題が、地理学的課題とされてきた (Smith, 1989)。

以前の展望論文において筆者は、先進国の都市における女性の地位を扱った研究の欠点は、女性と私的領域の関係を何ら批判せず受け入れたことであると述べた。女性の生活の「私的」領域については強調されてきたが、通勤距離における性差の研究においてさえ、都市内での女性特有の経験が、賃金労働からの排除や労働市場の性差による分断、特定の職業への女性の集中、「女性」職と「男性」職の特有な空間的分布と関連付けられてこなかった。

ジェンダーの不平等の概念に注目し続けているより最近の研究は、一般的な解釈では合理主義者の見方に該当するが、賃金労働と労働の再生産の重大な相互依存関係をより直接的に扱っている。その分析でフェミニスト地理学者は、このふたつの領域の区別を当然とみなすのではなく、さらには地理学のふたつの専門領域に切り離すのではなく、むしろふたつの領域を結び

つけようと試みている。例えば Hanson and Pratt (1988) は、家庭と労働の関係を再概念化して、都市地理学の別の定義を作り出す必要性を主張した。マサチューセッツ州ウースターでの大規模なインタビュー調査に基づいた女性の労働市場への参入に関する諸論文の中で、彼女らは世帯の意志決定や戦略、一世帯あたりの就業者数、地域社会の態度などすべてが、女性の就業意欲に影響を及ぼしていることを検証した。これらの研究は、就業行動の複雑さや性別に起因する根強い差異を考慮しない過度に単純な地理学的研究に対して大きな価値を持っている。彼女らは、就業機会の分布が特定の職業からあるカテゴリーの女性労働者を排除することを明らかにしている (Hanson and Pratt, 1991; Pratt and Hanson, 1991)。都市地理学と経済地理学の区分を突き破るこの種の地理学的分析は、伝統的な地理学観への異議申し立てである。しかしこれまでのところ、熟練技能の性別化 (Phillips and Taylor, 1980) や、企業におけるジェンダー化された組織形成のやり方 (Acker, 1990) に関するフェミニスト経済学者やフェミニスト社会学者の理論的かつ経験的議論に関して、明確に地理的な意義を明らかにしていない。労働市場における性差による分断の原因と結果、職場とコミュニティにおけるジェンダー化されたアイデンティティの形成、職業がジェンダー化される様式、潜在的労働者の空間的分布との関係といった問題は、他分野では刺激的な研究が行なわれているにもかかわらず、今のところフェミニスト地理学者が未開拓のテーマである (Cockburn, 1983; Game and Pringle, 1984; Pringle, 1989; Westwood, 1984)。

けれども、女性の労働生活と彼女たちの世帯責任、空間行動との間の関連に関する問題には、興味深い研究がある。例えば Wekerle and Rutherford (1988) は、1980年代のカナダにおける経済再編が女性の労働市場へのアクセスに及ぼした影響を検討した。この研究では、比較的短距離である女性の通勤パターンは、伝統的な育児の責任と地域労働市場が空間的に狭いことの両方から説明された。この議論とは逆になるが、現在では古典的研究となっている Kirsten Nelson (1986) の研究は、女性の就業機会の空間的分布と自宅の位置との間にトレードオフ関係がみられるだけでなく、雇用者もまた潜在的に女性労働力の多い地点に立地決定を行なうことを示した。彼女は、法人企業がサンフラン

シスコベイエリアにおいて「家庭中心」で大した野心を抱いていない白人で大卒の既婚女性を採用するため、郊外地域へと「バックオフィス」を移転させた様子を明らかにした。社会的二極分化が進行するインナーシティの中では、未婚の母親であることの多い有色女性も、高い地位にあつてキャリア志向の単身白人女性も、潜在的な事務労働力とは考えられなかったのである。

インナーシティの住宅ストックのジェントリフィケーションを扱った近年の研究は、この二極分化の問題を取り上げており、都市研究者が性別分業に関するフェミニストの主張や経済的変化と都市的変化の関連の重要性を正当に評価するようになったことを示す非常に興味深い事例である。貧乏人のアパートが金持ちの持ち家によって追い出されつつあるインナーシティでの居住者の入れ替えや、ジェントリフィケーションに関する多くの研究によれば、専門職に就く単身女性の所得拡大と子供のいない共稼ぎ世帯の増加が、これら住宅市場の変化の大部分を説明する。例えば、大規模な資本投資によって建て替え・改修されたヴァンクーバーの分譲マンションを事例にした Mills (1988) は、居住者の中に専門職の単身女性が多数含まれていることを発見した。モンリオールを事例とした Rose (1989) は、「家事支援サービス」が集中し「寛容な環境」(p. 131) を有するインナーシティが、「再生産労働を遂行するための多様な方法」を提供しており、そのため専門職の女性と低賃金の女性の両方を引きつけていると述べている。

ジェントリフィケーションについての研究を展望した Warde は、「インナーシティに共稼ぎ世帯が住むのは、職場と家庭のアクセスの問題と、賃金労働と無償労働の結合の問題を解決する」ためであると示唆した。彼女は「専門職の既婚女性を雇用する大企業の近くでジェントリフィケーションが生じているのではないかと推測している (Warge, 1991, p. 229)。しかしこのことは、高い地位の職業に就く女性の増大ともなう共稼ぎの裕福な専門職世帯の居住地選択と、育児が居住地選択に及ぼす影響の問題という、未解決の疑問を提起した。Lowe and Gregson (1989) は、居住地選択だけに注目したわけではないが、この種の問題に関する地理学研究に対して今後の課題を示唆した。彼女らは、就業女性の増加につれて保育サービスの供給がこれまでよりずっと重要になると述べた。従来すでに十分な公的育児サービスから政府がさらに手を引く

十分な公的育児サービスから政府がさらに手を引く時代において、個人的かつ私的な保育が唯一の選択肢となるだろう。Dyck (1990) は、母性を私的なものとして形成する種々な手段のひとつである空間一時間の制約について再検討を行なった。Bondi (1991) の近年の研究もまた、女らしさの形成に際して場所の意味に注目し、女性の就業上の地位とジェントリフィケーションとの関係を敷衍し、インナーシティにおける居住と伝統的ではない女らしさの形成との関連について新しい考え方を示した。多様な女らしさの形成に関心を示す彼女の研究は、筆者の分類では3番めのポストフェミニズムに入れた方が適切だろう。

VI 公的/私的区分の再編? 労働、家庭、社会的分極化と世界都市

都市の労働市場と住宅市場に関するこれらの研究は、様々な時代の特定の都市における資本主義賃金労働関係へと女性が組み込まれる多様な様式に対して洞察を与える。そしてそれらの様式は、各都市の経済発展段階、経済全体の中でのその位置と機能、その社会と都市における特定のジェンダー関係に左右される。これら多くの研究の背後にある理論的な枠組みは、はっきりしないことが多いが、全般的には、ほとんどの研究が単一の家父長制的資本主義制度ないし二重家父長制資本主義制度の視点に当てはまる。

フェミニスト都市地理学者による初期の論文は、かなり意識的に理論を指向する傾向が見られた。イギリスや北米の研究において、都市問題に取り組むほとんどの研究者の中心的立場は、ある種の社会主義フェミニズムに含まれる。家父長制的産業資本主義における女性の役割に関する考え方の変化は、先進工業化社会におけるジェンダー化された都市化の構造の検討にとって鍵となると見なされた。この研究の多くは、19世紀の都市化とともに発展した賃金労働と家庭内労働との空間的分業にその主張が基づいていた。そこでは、中産階級の女性の生活が同じ階級に属する男性の生活から徐々に分離していった。Mackenzie and Rose (1983) は、ロンドンとトロントの歴史的発展に関する初期の論文の中で、社会主義フェミニスト地理学の枠組みの構築を試みた。

同様の理論的位置づけは、『地理学とジェンダー』

(Women and Geography Study Group, 1984) の中の、都市に関する章にもみられる。しかし、Mackenzie and Rose の論文と同じ年に出版された Harman (1983) の先見の明ある批判の中で、この分析枠が、実際には 1950 年代以降消滅しつつあった家父長制的資本主義の形態にあまりにも重きを置きすぎていることが示唆された。Harman は「現代都市の趨勢が持つ意味をフェミニストの理論化に当てはめる」(p. 105) ような試みがまったくないことを批判した。この批判は、1970 年代半ば以降の多くの産業社会で急速な産業と都市の再編成が生じたため、より辛辣となった。製造業の衰退やサービス業の成長、集合的福祉供給の削減は、労働の性別分業や職種の(再)性別化に大きな変化をもたらした。これらの変化は、地理学者が注目し始めていた女性の生活にとって大きな意味を持っていた。都市の低賃金サービス部門に女性が大量に雇用されたことは、ジェンダーや空間的分業に影響を与えただけでなく、世帯収入のパターン、消費や交通、住宅の立地選択、さらには都市機能の維持にとって不可欠に違いない無償の女性にとっての入手可能性にも影響を及ぼしつつある。サービス経済と結びついた労働の性別分業の根本的変化が持つ意味を、多くの地理学者は認識し始めたところである。Susan Christopherson はジェンダーやサービス部門雇用について研究を進める数少ない地理学者である (Christopherson, 1989; また McDowell, 1991b, 1992 も参照)。依然として、地理学の言説における「本当の」労働とは、経済地理学に関するテキストのほぼ中心を占めてきた製造業における男性の労働と思われる。

しかし現在では、新しい労働が課題となっている。それは、製造業の雇用がおもに女性のサービス職に置き換えられつつある先進工業社会において、産業の変化と女性の労働市場参入、都市構造の間の相互関連に関するものである。性別分業に関する問題が地理学の議論においてより広く中心的テーマとなったことは、「本当の」現実世界の変化を示しているだけでなく、フェミニスト研究の影響と成熟も示している。しかし、ポスト工業化あるいはポストモダン都市の社会構造に関する議論の中で、新情報技術や他の「中心的」産業に就く基幹的労働者に関しても、距離摩擦を克服できる裕福な都市居住者に関しても、新情報技術の持つ束縛から解き放つ能力に対して過度に楽観的な意見もあった (Piore and Sabel, 1984; Castells and Henderson, 1989;

Thrift and Leyshon, 1992)。しかし、経済の再編成や技術革新と結びついた社会秩序は、富める者と貧しい者との間の社会的分極化が進んだ「デュアル・シティ」であると考えた研究者もいた (Castells, 1989)。Harrison and Bluestone (1988) は、アメリカ経済の実証的研究のコンテキストにおいて、これをアメリカの「空洞化」と呼んだ。Sassen (1991) は、ロンドン、ニューヨーク、東京の三つの世界都市について、経済構造と都市構造の両面において類似の傾向を確認した。これらの都市では、金融部門における専門職の拡大が、サービス業や低賃金肉体労働の製造業における様々な短期雇用・臨時雇用の大幅な拡大と並行して起きている。

定義によれば、拡大している「サービス業」や臨時雇用の多くは「女性職」である。上に挙げた研究者は、世界都市における性別分業の構造に対してこの分極化が持つ意味を明らかにしておらず、たんに女性雇用の成長を指摘しているだけである。事実 Castells は、1990 年代の都市地理学者にとって重要なテキストとなった彼の著書『情報都市 *The informational city*』(1989) の中で、20 年前の『都市問題 *The urban question*』の時と同じように、女性労働と社会的再生産についてほんの少ししかふれていない。Castells は、家事労働の物質的現実と都市空間の社会的分業の把握に消極的なように思われる。新情報技術によって生み出された空間と時間の変化を明らかにした後に、彼はそれが生産に及ぼす影響だけに注目している。彼は、都市的社会生活や居住パターンについての研究がほとんどないことに注目して (本稿で展望した論文の多くを読んでいないことは明らかである)、「これには明確な理由がある。…この領域には、イデオロギー的なバイアスがかかっている」と述べている。さらに彼は、「私的領域において生じている変化を検証する前に、新しい都市システムの基本的な [筆者が強調] パラメータを理解することが、まず必要である」と続ける。筆者がこの本を読んで不思議に感じたのは、重要な都市理論家 (訳者注: カステルのこと) が「社会生活」(おそらく、(男性の?) 職場以外のすべてのもの) をイデオロギー的、かつ私的なものとして捉え続けるほど、この 10 年間に行なわれてきたフェミニストの理論化は目立たないものなのだろうか、という点である。しかしその後、フェミニズムとポストモダニズムは手を携え、西欧の学問を形作る二分的なカテゴリーに対して理論的批判

を浴びせかけた。公的領域と私的領域、社会的領域と経済的領域の区分は、しだいに妥当性を失ってなくなりつつあるのである。

VII 結語

(本誌の掲載規定による単語数という意味での)スペースのために、上記の理論的批判の考察は割愛する。しかし、地理的分析に対するその影響はかなり大きいと言えるだろう。これについては、筆者の次号論文の課題となるだろう。次号では、地理学研究に対するフェミニストのアプローチの影響と含意を振り返るのではなく、むしろ将来を見通して評価することが主題なのである。

しかし、筆者がフェミニスト経験主義に分類した研究は、人文地理学者の偏見や人文地理学の構造をどれほど変えたのだろうか? 研究初期のフェミニスト地理学者の理論的方向性は、多くの点において、社会的正義の問題に多岐にわたって関心を持つ地理学者の諸グループの理論的方向性と正反対というよりも、むしろ同一方向であった。それゆえ、排除され抑圧された集団、すなわち女性や労働者階級、エスニックマイノリティに対する共通した関心が、「ラディカル」地理学者と結びつけたのである。

1970年代から80年代初期の人文地理学は、異なる方向に進むふたつの集団から構成されていたと大まかに描けるだろう。その時期の初め頃には、数学的モデル、合理的選択、文脈を考慮しない考え方を支持する地理学者は、構造主義の偉大な理論家たちと対峙しており、女性は後者の行軍の最後尾にあった。低い位置に置かれていたにもかかわらず、その時代の中心的なフェミニスト理論家の多くが知的かつ政治的魅力を感じたため、フェミニストは構造主義の中に共通の関心を発見した。その当時多数の地理学者は、とくにイギリスでは、社会主義フェミニストの枠組みに基づいて研究を行っていた。しかし、マルクス主義の概念を拡張して再生産、家事労働、出産や育児といった社会関係を取り込もうと試みた結果は、労働運動や学問的言説さえも男性の偏見に満ち溢れて問題であることを認識させたに過ぎなかった。最近15年間の都市経済地理学における大きな変化、すなわち、アルチュセールに影響を受けた構造主義的マルクス主義からフランクフ

ルト学派や、それによるイデオロギーと文化に関するマルクス主義的概念の展開、史的变化における人間主体の役割を主張する社会学者 Anthony Giddens から多大な影響を受けた、特殊性、複雑性、地域的闘争に敏感なジオヒストリカルな唯物論へという変化、にもかかわらず、ジェンダーの問題は、「左翼」地理学者の関心の外に置かれたままであった。それゆえ1989年に Susan Christopherson は、彼女が地理学的営為と見なしているものの範囲外に置かれているフェミニズムとフェミニストの状況に対して手厳しく非難した。

もちろん、私の対立的な学問的パラダイムの分類はやや大げさであり、個人や人間主体、不平等に関心を示す実践的ヒューマニストとして特徴づけられる一連の人文地理学者は、この10年間中道的な立場を保ってきた。これまで展望してきた膨大な研究は、この中道の立場にうまく当てはまる。けれども、政治学者 Carole Pateman (1987) によって行なわれた伝統的なリベラル派理論の背後にあるマスキュリストの仮説に対する徹底的な批判は、アカデミズムに属さない有色女性やフェミニストから浴びせかけられたフェミニスト理論と実践の持つ民族中心主義やエリート主義への強烈な批判 (McDowell, 1991b を参照) とともに、女性全体に共通する抑圧の存在やフェミニスト地理学者の目的や仮定一つまり、改革主義的政策に対して誰もが抱いている信奉一を冷静に再評価させることとなった。1980年代を通じて次第に明らかになったことは、初期の論文の楽観的仮説が誤っていたこと、あるいはフェミニストの異議申し立てのスケールや性質が当初の認識とは違ったことである。フェミニスト地理学が直面している課題は、当初考えていたものよりもずっと本質的でもっと刺激的なものであることが明らかとなった。地理学にもっと女性を参加させたり、例えば経済地理学や社会地理学といった分類を打破する一このふたつは1982年に Hanson and Monk が論文の中で述べた課題である一だけでなく、フェミニスト研究は、人文地理学における多くの根本的仮定の認識論的基盤に対する異議申し立てであることが次第に明らかとなってきた。

しかし、次号の論文で検討されるこの異議申し立ては、ここで概述した諸研究なしには存在しえないだろう。フェミニスト研究者の約4分の1は、初期の研究に対して、全体主義的で還元主義的、人種差別的、エ

リート主義的であり、男性的視点に基づくとして拒否するようになった。しかしこうした拒否は、文化の形成としてのフェミニスト地理学のこれまでの歴史を誤解しているように筆者には思われる。表象、ジェンダーシンボリズム、意味、セクシュアリティといった問題（最近のフェミニスト地理学にとって重要となりつつある領域であり、これについては第2部で述べるつもりである）よりも、おもに社会関係の領域でその時期に提起されたアプローチや視角、具体的な問題は、特定の結びつきや理論関係、社会環境から生じ、多様な形態をとる。このような多様かつ多面的な研究を批判することは、危険をともなう仕事である。そして、それを展望することも、同様に危険をともなうことを筆者は実感した。冒頭で筆者が強調したように、この論文はフェミニスト地理学の短い歴史、つまり異なる社会的環境や国家の状況において異なる形態をとる歴史に関して、ある特定の見方を映し出したものである。しかし、1980年代に出版された様々な理論的・実証的な著書や論文は、地理学の主題としてジェンダーの区分を据えることに成功を収めた。これによって、アカデミック研究者と研究対象の両面で女性と男性の存在が明示的となり、地理学に暗黙のマスキュリティに異議申し立てをすることになった。フェミニスト経験主義はまた、世界の様々な地域における女性の社会的地位や社会的状況にかなりの多様性がみられることを記述し、ジェンダー・アイデンティティと場所の問題を提起することに、地理学として成功を収めた。とりわけこの研究によって、ジェンダーの地域的な成り立ちにみられる多様性と、男らしさ・女らしさの特性が地域、階級、エスニシティによって異なることに関して、より複雑で理論的な疑問を提起できるようになりはじめた。したがって、ここ10年間におけるとりわけ地理的事象への様々な関心は、来るべき将来のフェミニスト地理学にとっての主題の範囲を拡大するための社会理論における脱構築主義への広汎な関心と対応していたのであった。

追記

本稿と次稿は、1991年4月、ロサンゼルスで不幸にも殺害されたフェミニストであり、地理学者であり、法律家であり、友人でもあった Penny Nanopoulos を追悼して捧げる。

参考文献

- Acker, J. 1990: Hierarchies, job, bodies: a theory of gendered organization. *Gender and Society* 4, 139-58.
- Andrew, C. and Milroy, B.M., editors, 1988: *Life spaces: gender, household, employment*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Bagguley, P. 1990: *Restructuring: place, class and gender*. London: Sage.
- Bondi, L. 1990: Progress in geography and gender: feminism and difference. *Progress in Human Geography* 14, 438-45.
- 1991: Gender divisions and gentrification: a critique. *Transactions, Institute of British Geographers* 16, 190-98.
- 1992: Gender and dichotomy. *Progress in Human Geography* 16, 98-104.
- Bowlby, S., editor, 1984: Women and the built environment. *Built Environment* 10 (special issue).
- 1990: Women and the designed environment. *Built Environment* 16 (special issue).
- Bowlby, S., Lewis, J., McDowell, L. and Foord, J. 1989: The geography of gender. In Peet, R. and Thrift, N., editors, *New models in geography*, Volume 2. London: Unwin Hyman, 157-75.
- Bowlby, S. and McDowell, L. 1987: The feminist challenge to social geography. In Pacione, M., editor, *Social geography: progress and prospect*, London: Croom Helm, 295-323.
- Boxer, M. 1982: For and about women: the theory and practice of women's studies in the United States. In Keohane, N., Rosaldo, M. and Gelpi, B., editors, *Feminist theory: a critique of ideology*, Brighton: Harvester Press, 237-71.
- Boys, J. 1990: Women and the designed environment: dealing with the difference. *Built Environment* 16, 249-56.
- Brydon, L. and Chant, S., editors, 1989: *Women in the third world: gender issues in rural and urban areas*. London: Edward Elgar.
- Burnett, P. 1973: Social change, the status of women and models of city form and development. *Antipode* 5, 57-61.
- Castells, M. 1977: *The urban question*. London: Edward Arnold. カステル, M. 著, 山田 操訳 (1984): 『都市問題』 恒星社厚生閣.
- 1983: *The city and the grassroots*. Oxford: Basil Blackwell. カステル, M. 著, 吉原直樹ほか訳 (1997): 『都市とグラスルーツ』 法政大学出版局.
- 1989: *The informational city*. Oxford: Basil Blackwell.
- Castells, M. and Henderson, G., editors, 1989: *The city and information technology*. London: Sage.
- Chant, S., editor, 1991: *Gender and migration in developing countries*. Brighton: Belhaven.
- Christopherson, S. 1989: Flexibility in the US service economy and the emerging spatial division of labour. *Transactions, Institute of British Geographers* 14, 131-43.

- Cockburn, C. 1983: *Brothers: male dominance and technological change*. London: Pluto Press.
- 1986: *Machinery of dominance*. London: Pluto Press.
- Di Leonardo, M. 1991: *Gender at the crossroads of knowledge: feminist anthropology in the postmodern era*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Di Stefano, C. 1990: Dilemmas of difference: feminism, modernity and postmodernism. In Nicholson, L., editor, *Feminism: postmodernism*, London: Routledge, 63-82.
- Duncan, S. 1989: Gender divisions of labour in Greater London. *Urban and Regional Studies University of Sussex Working Paper 73*, Brighton, Sussex.
- 1991: The geography of gender divisions of labour in Britain. *Transactions, Institute of British Geographers* 16, 420-39.
- Dyck, I. 1990: Space, time and renegotiating motherhood: an exploration of the domestic workplace. *Environment and Planning D: Society and Space* 8, 459-83.
- Elson, D. and Pearson, R. 1981: Nimble fingers make cheap workers: an analysis of women's employment in Third World export manufacturing. *Feminist Review* 7.
- 1989: *Multinationals and women's work in Europe*. London: Macmillan.
- England, K. 1991: Gender relations and the spatial structure of the city. *Geoforum* 22, 135-47.
- Fincher, P. 1988: Class and gender relations in the local labour market and the local state. In Wolch, J. and Dear, M., editors, *The power of geography*. London: Unwin Hyman, 93-117.
- Fitzgerald, F. 1987: *Cities, on a hill: a journey through contemporary American cultures*. London: Picador.
- Fitzsimmons, M. 1989: The matter of nature, *Antipode* 21, 106-20.
- Game, A. and Pringle, R. 1984: *Gender at work*. London: Pluto Press.
- Garcia-Ramon, M.D., Castener, M. and Centelles, N. 1988: Women and geography in Spanish Universities. *Professional Geographer* 40, 307-15.
- Gibson, K. 1991: Company towns and class processes: a study of the coal towns of Central Queensland. *Environment and Planning D: Society and Space* 9, 285-308.
- Glucksmann, M. 1990: *Women assemble: women workers and the new industries in inter-war Britain*. London: Routledge.
- Hanson, S. and Johnston, I. 1985: Gender difference in work length trip: explanations and implications. *Urban Geography* 6, 193-219.
- Hanson, S. and Monk, J. 1982: On not excluding half of the human in human geography. *Professional Geographer* 34, 11-23.
- Hanson, S. and Pratt, G. 1988: Reconceptualising the links between home and work in urban geography. *Economic Geography* 64, 299-321.
- 1991: Job search and the occupational segregation of women. *Annals, Association of American Geographers* 81, 229-53.
- Haraway, D. 1991: Situated knowledges: the science question in feminism and the privilege of partial perspective. In Haraway, D., editor, *Simians, Cyborgs and women: the reinvention of nature*. London: Free Association Books, 183-201.
- Harding, S. 1986: *The science question in feminism*. Ithaca: Cornell University Press.
- Harman, E. 1983: Capitalism, patriarchy and the city. In Baldock, C. and Cass, B., editors, *Women, social welfare and the state in Australia*, Sydney: Allen and Unwin, 103-20.
- Harrison, B. and Bluestone, B. 1988: *The great U-turn*. New York: Basic Books.
- Harvey, D. 1990: On space and time: reflections on the geographical imagination. *Annals, Association of American Geographers* 80, 418-34.
- Hayden, D. 1983: *Redesigning the American dream*. New York: W. W. Norton. ハイデン, D.著, 野口美智子(劫)訳 (1991): 『アメリカン・ドリームの再構築——住宅, 仕事, 家庭生活の未来——』勁草書房.
- Holcomb, B. and Jones, J.P. 1990: Work, welfare and poverty among black female-headed families. In Kodras, J. and Jones, J.P., editors, *Geographic dimensions of United States social policy*, London: Edward Arnold, 200-17.
- Holcomb, B., Kodras, J. and Brunn, S. 1990: Women's issues and state legislation: fragmentation and inconsistency. In Kodras, J. and Jones, J.P., editors, *Geographic dimensions of United States social policy*, London: Edward Arnold, 178-99.
- Knopp, L. 1990: Some theoretical implications of gay involvement in an urban land market. *Political Geography Quarterly* 9, 337-52.
- Kobayashi, A. and Mackenzie, S., editors, 1989: *Remaking human geography*. London: Unwin Hyman.
- Lauria, M. and Knopp, L. 1985: Towards an analysis of the role of gay communities in the urban renaissance. *Urban Geography* 6, 152-69.
- Leavitt, J. 1991: Redesigning women's welfare. A conference paper given at the Association of American Planners' Conference, Oxford, July. (Available from the author, Graduate School of Architecture and Urban Planning, University of California, Los Angeles, California.)
- Ley, D. 1983: *A social geography of the city*. New York: Harper and Row.
- Lim, L. 1990: Women's work in export factories: the politics of a cause. In Tinker, I., editor, *Persistent inequalities: women and world development*, Oxford: Oxford University Press.
- Little, J., Peake, L. and Richardson, P., editors, 1988: *Women in cities*. London: Macmillan.
- Lowe, M. and Gregson, N. 1989: Nannies, cooks, cleaner, au pairs... new issues for feminist geography? *Area* 21, 415-17.
- McDowell, L. 1979: Women in British geography. *Area* 11, 151-55.
- 1983: Towards an understanding of the gender division of urban space. *Environment and Planning D: Society and Space* 1, 59-72.
- 1989a: Women in Thatcher's Britain. In Mohan, J., editor, *A political geography of Britain*, London: Macmillan, 172-86.
- 1989b: Women, gender and the organisation of space. In Gregory,

- D. and Walford, R., editors, *Horizons in human geography*, London: Macmillan, 136-51.
- 1991a: The baby and the bath water: deconstruction, diversity and feminist theory in geography. *Geoforum* 22, 123-34.
- 1991b: Life without Father and Ford: the new gender order of post-Fordism. *Transactions, Institute of British Geographers* 16, 400-19.
- 1992: Restructuring production and reproduction: some theoretical and empirical issues relating to gender, or women in Britain. In Gottdiener, M. and Pickvance, C., editors, *Urban life in transition*, Beverley Hills, California: Sage, 77-105.
- McDowell, L. and Peake, L. 1990: Women in geography revisited. *Journal of Geography in Higher Education* 14, 19-30.
- Madigan, S., Munro, M. and Smith, S. 1990: Gender and the meaning of home. *International Journal of Urban and Regional Research* 14, 625-47.
- Mackenzie, S. 1987: Neglected spaces in peripheral places: homeworkers and the creation of a new economic centre. *Cahiers de Geographie du Quebec* 83, 247-60.
- 1989: Women in the city. In Peet, R. and Thrift, N., editors, *New models in geography*, Volume 2, London: Unwin Hyman, 109-26.
- Mackenzie, S. and Rose, G. 1983: Industrial change, the domestic economy and home life. In Anderson, J., Duncan, S. and Hudson, R., editors, *Redundant spaces and industrial decline in cities and regions*, London: Academic Press, 155-99.
- Marston, S. and Saint-Germain, M. 1991: Urban restructuring and the emergence of new political groupings : women and neighbourhood activism in Tucson, Arizona. *Geoforum* 22, 223-36.
- Massey, D. and Allen, A. 1984: *Geography matters!* Cambridge: Cambridge University Press.
- Matrix 1986: *Making space: women and the man-made environment*. London: Pluto Press.
- Maynard, M. 1990: The re-shaping of sociology: trends in the study of gender. *Sociology* 24, 269-90.
- Mills, C. 1998: Life on the 'upslope': the postmodern landscape of gentrification. *Environment and Planning D: Society and Space* 6, 169-89.
- Mohanty, C.T.A., Russo, L., Torres, editors, 1991: *Third world women and the politics of feminism*. Bloomington, Indiana: University of Indiana Press.
- Momsen, J. 1980: Women in Canadian geography. *Canadian Geography* 24, 177-83.
- 1991: *Women and development in the third world*. London: Routledge.
- Momsen, J. and Kinnaird, V. 1993: *Different places, different voices*, London: Routledge.
- Momsen, J. and Townsend, J., editors, 1987: *Geography and gender in the third world*. London: Hutchinson.
- Moore, H. 1988: *Feminism and Anthropology*. Cambridge: Polity Press.
- Moser, C. and Peake, L. 1987: *Women, human settlements and housing*. London: Tavistock.
- Munro, M. and Smith, S. 1989: Gender and housing: broadening the debate. *Housing Studies* 4, 3-17.
- Murgatroyd, L., Savage, M., Shapiro, D., Urry, J., Walby, S., Warde, A. and Mark-Lawson, J. 1985: *Localities, class and gender*. London: Pion.
- Nelson, K. 1986: Labor demand, labor supply and the suburbanization of low wage office work. In Scott, A. and Storper, M., editors, *Production, work and territory*, London: Allen and Unwin, 149-71.
- Pain, R. 1991: Space, sexual violence and social control: integrating geographical and feminist analyses of women's fear of crime. *Progress in Human Geography* 15, 415-31.
- Pateman, C. and Gross, E., editors, 1987: *Feminist challenges*. Boston: North Eastern University Press.
- Peake, L., editor, 1989: The challenge of feminist geography. *Journal of Geography in Higher Education* 13, 85-121.
- Pearson, R. 1986: Female workers in the first and third worlds: the greening of women's labour. In Purcell, K., Wood, S., Watson, A. and Allen, S., editors, *The changing experience of employment*, London: Macmillan. Also in Pahl, R., editors, 1988: *On work: historical, comparative and theoretical approaches*, Oxford: Basil Blackwell, 449-66.
- 1991: Nimble fingers revisited. Paper presented to the annual conference of the Development Studies Association, Swansea, 11-13 September. (Available from the author, School of Development Studies, University of East Anglia, Norwich, Norfolk, UK.)
- Penrose, J., Bondi, L., Kofman, E., McDowell, L., Rose, G. and Whatmore, S. 1992: Feminism and feminists in the academy. *Antipode: a Journal of Radical Geography*.
- Phillips, A. and Taylor, B. 1980: Sex and skill: notes towards a feminist economics. *Feminist Review* 6, 78-88.
- Pickup, L. 1984: Women's gender role and its influence on their travel behaviour. *Built Environment* 10, 61-68.
- Piore, M. and Sabel, C. 1984: *The second industrial divide: possibilities for prosperity*. New York: Basic Books.
- Pratt, G. 1989: Reproduction class and the spatial structure of the City. In Peet, R. and Thrift, N., editors, *New models in geography*, Volume 2. London: Unwin Hyman, 84-108.
- 1990: Feminist analyses of the restructuring of urban life. *Urban Geography* 11, 594-605.
- Pratt, G. and Hanson, S. 1991: On the links between home and work: family-household strategies in a buoyant labour market. *International Journal of Urban and Regional Research* 15, 55-74.
- Pringle, R. 1989: *Secretaries talk*. London: Verso.
- Radcliffe, S. 1990: Ethnicity, patriarchy and incorporation into the nation: female migrants as domestic servants in Peru. *Environment and Planning D: Society and Space* 8, 379-94.
- Regulska, J. 1991: Changing gender relations in urban space. *Geoforum*

- rum 22 special issue.
- Roberts, M. 1991: *Women and the man-made environment*. London: Routledge.
- Rose, G. and Villeneuve, P. 1988: Women workers and the inner city: some implications of labour market restructuring in Montreal 1971-1981. In Andrew, C. and Milroy, B.M., editors, *Life spaces: gender, household, employment*, Vancouver: University of British Columbia Press, 31-64.
- Rose, G. 1989: A feminist perspective of employment restructuring and gentrification: the case of Montreal. In Wolch, J. and Dear, M., *The power of geography: how territory shapes human life*, London: Unwin Hyman, 118-38.
- Sassen, S. 1991: *The global city*. Berkely and Los Angeles: University of California Press.
- Saunders, P. 1989: The meaning of 'home' in contemporary English culture. *Housing Studies* 4, 177-92.
- Seager, J. and Olson, A. 1986: *Women in the world: an international atlas*. London: Pluto.
- Short, J. 1989: Yuppies, yuffies and the new urban order. *Transactions, Institute of British Geographers* 14, 173-88.
- Smith, S.J. 1989: Society, space and citizenship: a human geography for the new times? *Transactions, Institute of British Geographers* 14, 144-56.
- 1990: Income, housing wealth and gender inequality. *Urban Studies* 27, 67-88.
- Thrift, N. and Leyshon, A. 1992: In the wake of money: the city of London and the accumulation of capital. In Budd, L. and Whimster, S., editors, *Global finance and urban living*, London: Routledge, 282-311.
- Tivers, J. 1979: How the other half lives. *Area* 11, 302-306.
- 1985: *Women attached: the daily lives of women with children*. London: Croom Helm.
- Valentine, G. 1989: The geography of women's fear. *Area* 21, 385-90.
- 1990: Women's fear and the design of public space. *Built Environment* 16, 288-303.
- Van Vliet, W., editor, 1988: *Women, housing and community*. Aldershot: Avebury.
- Warde, A. 1991: Gentrification as consumption. *Environment and Planning D: Society and Space* 9, 223-32.
- Waring, M. 1990: *If women counted*. San Francisco: Harper.
- Watson, S. and Austerberry, A. 1986: *Women and homelessness*. London: Routledge.
- Watson, S. 1988: *Accommodating inequality*. Sydney: Allen and Unwin.
- Wekerle, G. and Rutherford, B. 1988: The mobility of capital and the immobility of female labour: responses to economic restructuring. In Wolch, J. and Dear, M., editors, *The power of geography*, London: Unwin Hyman, 139-72.
- Westwood, S. 1984: *All day, every day*. London: Pluto Press.
- Whatmore, S. 1991: *Farming women*. London: Macmillan.
- Winchester, H. and White, P. 1988: The location of marginalised groups in the inner city. *Environment and Planning D: Society and Space* 6, 37-54.
- Women and Geography Group 1984: *Geography and gender*. London: Hutchinson.
- Zelinsky, W., Monk, J. and Hanson, S. 1982: Women and geography: a review and prospectus. *Progress in Human Geography* 6, 317-66.
- Zukin, S. 1988: *Lofi living: culture and capital in urban change*. London: Radius.